

流動化する現代社会，固定化する仲間集団 —学生コミュニティをめぐる今日の課題—

土井隆義
筑波大学

筑波大学の土井と申します。今日は、学生のコミュニティのありようについて大まかにお話させていただければと思っております。タイトルに、流動化する現代社会，固定化する仲間集団とあるように、今日の社会と人間関係を対比的にとらえてみたいと思います。

仲間集団の同調圧力というのはまあ日本の昔から言われているものでもありますけれども、この質的なありようがどうも近年、学生たちの間で変わってきているのではないだろうかと考えています。まずこちら【スライド3】をご覧ください。生活に満足している人の割合を年齢別に見たものです。横軸が年齢です。73年はこのようなカーブを描いておりました。それが近年どうなっているかと申しますと、このように若い世代ほど生活満足度が高いというのが近年の傾向です。

一般的によく言われるのは日本の社会が成熟をし、豊かになってきているから、生活満足度が上がってきているということですが、もしもそうであるならば、73年のこのグラフは、近年はこうなっていないとおかしいはずですが。この社会に生きているのは若者だけではありません。しかし実際には、このように傾いているわけですね。これをどう考えるかということですが、今日はコミュニティの話ですから人間関係に着目して考えてみたいと思います。

生活に満足の理由、今は若い世代で50%以上を占めているのが人間関係です、家族、恋人、友人といった人間関係が生活に満足の行った大きな理由となっています。

これは大学も同じで、大学内の友達の数と大学の満足度はきれいに相関しています。学内で、キャンパスで友達の多い学生ほど大学満足度が高いという傾向が表れているのです。当然、友人関係が大切だというのは若者に普遍的な特徴だと思われるかもしれませんが。

しかし、実は、70年代と比べてみますと、どうも昔の若者と今は傾向が変わっているようです。充実した生活を送るには何が大切か。若年層を見ていただきたいと思います【スライド6】。経済力が下がってきていて、付き合い、つまり、人間関係が上昇してきていることがわかります。若年層だけを抜き出してみますと、このようになっています。経済力は大切というのは男性女性も減ってきました。一方、付き合いは大切が男性女性も増えています。経済力、言ってみれば経済資本ですね、これ経済資本のウェイトよりもむしろ付き合い、つまりよく言われる社会関係資本：ソーシャルキャピタルですね。こちらのウェイトが高まってきているわけです。

これ【スライド8】は、自分の将来は明るいと思うかを学生たちに聞いたものです。若年層に聞いたものです。自分の将来は明るいというように答える、そういう若者の数が増え

るのは友達の数が多い人ほどなのです。つまり、ここからもいわゆるこの社会関係資本が大きく作用していくだろうということが想定できるかと思います。この人間関係のありようを、まず流動化という観点から少し整理をしてみたいと思います。

次に、それを今度は世代の関係で、成熟感という観点から、世代と世代の関係について整理をしてみたいと思います。

三点目に、そういった中で、今学生たち、若者たちが日々、どういう人間関係を営んでいるか、これを内閉化という観点からお話してみたいと思います。

最後にこの背景にある承認という問題、承認不安と我々教育者はどのように向かい合っていたらよいのだろうか、この四つの柱で話をしていきたいと思います。

1. 人間関係の流動化

では早速、第一点目の流動化についてお話を進めていきたいと思います。

まずこちら【スライド10】をご覧ください。大学生に聞いたものです。自分のことをどう思うか、上から、特に才能がある、ルックスがいい、勉強ができる、一番下が人間関係に恵まれている、もう圧倒的な差で自分は人間関係に恵まれている、これは客観的にそう思われているのか、そう思いたいのかはわかりません、アンケートですから。しかし、いずれにしてもこのように人間関係のウェイトが非常に高いことがわかります。仮に人間関係が実際に恵まれているとするならば、これを光の面と捉えておきたいと思います。

ところが、裏では別の事態も進んでいるわけです。今大学を中退する学生の問題が出てきています。その理由ですけれども、一番目は学習意欲の喪失ですが、二番目は人間関係です。実は、この調査をやっているNEWVERYの後追い調査【スライド11】を見てみますと、一番目と二番目はリンクをしているといわれています。つまり、大学での人間関係がうまくいかないと、だんだんと授業から足が遠のいてしまい、その結果授業についていけなくなってしまって学習意欲を喪失してしまう。従って、学習意欲の喪失と人間関係はリンクをしているとしばしば言われます。これを先ほどの光の面に対して、陰の面というように考えておきたいと思います。

ではなぜこのような二面性が生じているのでしょうか。これを少し考えてみたいと思います。

我々、社会学者が行った調査があります。友人の数を調べたものです【スライド12】。ここでは16歳から19歳、ちょうど初年次に当たるあたりを抜き出しています。まず2002年での部分をご覧ください。これは10人単位で集計をしています。一番多いのは左から3つ目でしょう。11人から20人をピークにして大きな山なりになっています。この調査は10年おきに行っているので2012年が最新のデータとなっております。ご覧のように山が大きく崩れてきていることがわかります。

一般に分布を調べるときに私たちは、個々のデータの平均値からの偏差を取って、いわゆる標準偏差を求めますけれども、標準偏差は平均値を合わせないと比較できませんのでここでは標準偏差を平均値で割った変動係数を出してみました。そうしますと2002年で0.78、現在で1.54なのです。つまり分散が大きくなってきている。友達の多い学生と友達の少ない学生の差が激しくなっているということがわかります。例えて言うならば、このように液体が落ちてきたときに、粘り気があるとこのような山ができますけれども、

粘り気は下がってきて、さらさらになってくるとこういう状態になっていきます。つまり、流動化ですね。こういうことが今の若者たちの人間関係に生じているということなのです。

ではそれはどういう理由なのか。この調査では、あなたは友達をたくさん作るようにどの程度の強さで心がけていますか、と5段階のスケールで聞いています。その結果と今示した友人の数との相関をとってみました。相関があるのは当たり前です。心がけが強い学生ほど友人の数は一般的に増えていく傾向にあります。

直線を取るとこんな感じでしょうか。しかし、このブルーの点が10年後に現在ではピンクのように変わってきているのです。つまり相関が強くなっています。これも係数を出してみますと、2002年では0.14でした。現在の係数を出しますと0.22です。このように相関があるのは当たり前ですが、それがさらに強くなっているのです。

これをどのように解釈するかですが、今日はこう考えてみたいと思います。友人関係というのは、今示した個人的な心がけのような個人的要因と、それから、学生ならばたまたま大学で、例えば初年次にどういうクラスに入ってどういう仲間と一緒にになったのか、あるいはサークルでどういう仲間と一緒にになったのか、そういった制度的な要因、この二つの要因で決まってくるでしょう。このときに個人的な要因のウェイトが高まってきたということは、制度的な要因のウェイトがかつてよりも下がってきている、つまり、ウェイトがこちらにかかるようになってきているという風に言ってもよいでしょう。これを今日は人間関係の流動化という風にとらえておきたいと思うのです。

そうしますと、ここには二面性があることがよくわかります。当然ながら流動性が高まってくると、制度、組織によって不本意な人間関係は強制されません。したがって、一般的に友人関係、人間関係の満足度は上昇していくでしょう。不本意な関係は強制されないからです。しかしそれは裏を返しますと、強制されないということはひっくり返せばそういった組織や制度が人間関係を保証してくれる共通の地盤ではなくなったということをも意味します。関係が縛られないということは関係が組織によって守ってもらえないということでもあるからです。

つまり、ぼくたち私たちが友達である根拠は、学友である根拠は、同じ語学クラスであるとか、同じサークルの一員であるということにはなくなってくるわけです。そうしますと、残ってくるのはお互いの気持ちにしかありません。私たちは、友達なんだ、友人なんだ、学友なんだと日々確認し合わないといけません。ほんとうに仲良しで、しかもこうやって確認しあう、そこにしか友人であることの根拠はなくなってきます。これが流動性の光の面と、陰の面、二面性なんですね。当然、その分だけ関係の自由度は増していきますが、不安定化も増していくことになるわけです。

これは内閣府が行っている青年意識調査にも表れています【スライド13】。今、友人や仲間といるときに充実感を覚えるという若者はだんだんと増えてきています。ちょうどこれは18歳から24歳ですから大学生がすっぽり入る年代です。これより、充実度は上がってきているわけです。いろいろ理由はあると思いますが一つの理由は不本意な人間関係を組織、制度によって昔のようにきつく強制されなくなってきたということでしょう。

当然ながら充実度は上がってくるわけですから、そういった人間関係に悩みや心配事を感じる若者は減ってくるはずですが、実際に減ってきました。悩み事は友人や仲間のことと

いう回答は減ってきていたのです。

ところがこれが世紀の変わり目あたりに底を打った後、反転して今急激に増え始めています。友人仲間のことに悩みや心配事を感じるという人が増えてきているんですね。これはいま申し上げた流動性というものを背景におけばよく理由はわかるかと思います。人間関係の流動性が高まってくると悩みや心配事の中身、おそらく質は変わってくるでしょう。組織、制度によって不本意な人間関係を強制されなくなりますから、不満感は減ってくるはずです。

しかし、流動性が高まってくるわけですから、不満感が減る一方で、裏ではだんだんと、不安感が募ってくることになります。本当に自分には友人ができるのだろうかという不安感が募ってくることになるわけです。アンケートでは悩みや心配事と聞いていますので、この不満の要素、不安の要素の合成成分として表れてくるはずですが、したがって、アンケートを取ると、このV字カーブを描いてくることになるかと解釈できます。

では、問題はこの分水嶺です。不満の減少分を不安の上昇分が上回ってしまう。これが日本ですとちょうど世紀の変わり目あたりになります。ではいったいこのころの社会にいったい何があったのか。いろいろ理由を考えることはできますが、今日着目をしてみたいのは、ちょっと話を大きくしますけれども、日本の経済成長率です。日本の経済成長率はこのように戦後、高度成長期、安定成長期、低成長期と三段階で成長率を落としながら、日本は豊かな社会を築いてきたわけです【スライド15】。今日は話を単純化するためにバブルが崩壊するまでの成長社会、それからバブル崩壊後の成熟社会、この二つに分けて考えてみたいと思います。時間の経過とともにちょうど山を登るように、日本の社会は高度成長、安定成長、低成長と変化をしてきたからです。

仮にこの高度成長期にある若者がいたとします。このときに流動性が増すということはどのように感じられたのでしょうか。みんなで手をつないで山を登っている最中ですから、ここで変化が増すということは、今いるこのポジションよりもみんなでもっと高い位置にいけることを意味します。つまり流動性の高まりは多くの人間にとってここではチャンスと感じられたはずです。もちろんみんながみんなこの流動性の恩恵を被れるわけではありませんが、それでも社会全体が上昇しているのです、それなりにみんなチャンスを感じる事ができたのです。

その後安定成長期になっていきますが、まだ流動性は高まってきます。ご承知のように80年代には中曽根内閣の時に臨教審答申が出されました。日本の教育はいわゆる個性化教育へと大きく舵をきったわけです。つまり、この流動性の高まりの中で、チャンスを生かすためには個性や才能が大切だとみんなが思った時代がありました。

ところが、その後低成長期に入り、いま私たちはもうここに立っているわけです。しかし、流動性は収まっていません、むしろ高まってきていて、いわゆるグローバル化の中で流動性はさらに増してきています。では、ここに立っている人間にとって流動性はどのように感じられるのでしょうか。

今このポジションにいるわけですから、それなりにみんな豊かな生活を送ってはいるわけです。ではここから自分だけが落ちてしまったらどうしようという不安感が募ってくることになるでしょう。つまりここでの流動性の高まりはチャンスというよりもむしろリスクとして感じられる。そういう効果が強まってくるのです。

ではこのリスクをヘッジするためには何が大切か、個性や才能だろうか、我々はそう考えますが、若い人はそう考えない。そんなことを考えたら、自分だけが浮いてしまう。そうではなく人間関係を重視することによって、自分だけが外されまいとする。で、自分だけがこのポジションからこぼれることをなんとかして防ごうとする。そういう傾向が強まってきているのではないだろうかということです。

実際、近年新聞の記事を見てみますと、いわゆるコミュニケーション能力という言葉が出てくる新聞記事の数は、2000年以降急激に増えてきています【スライド18】。具体的には、2003年以降ですね。コミュ力ということが社会全体で着目されるようになってきているわけです。これは学齢期においても同じです。

同じように社会の成長に伴って変わってきたものがあります。ここで示したものは、大学は関係ありませんが高校までの特別支援学級の数です【スライド16】。戦後グーッと増えてきて70年代いったん横ばいになります。ところが90年代以降急激に増えてきています。では、そこに通っている通級している子供たちの数はどうか。戦後グーッと増えてきます。70年代にいったんピークを迎えた後、いわゆるノーマライゼーションの中でいったん減っていきます。ところがそれが90年以降に急激に増えているわけです。人間の生物学的特徴がこの短期間に大きく変わるはずがないので、これは明らかに社会制度に引きずられた結果でしょう。

考えてみれば、当時は特殊学級といいましたが、70年代に急激に増えていた特別支援学級に通っているお子さんたちの多くは、言ってみれば学習に困難を持っていたお子さんだったと思います。もちろん近年もいらっしゃいますが、近年急激に増えているといわれているのはいわゆる人間関係に困難を抱えたお子さんであるということです。

だから、たとえば、一部の発達障害の学生にとって見れば、人間関係はとても苦手なわけですね。そういう子供、学生たちは非常に生きづらさを感じているのです。

実際、このように先ほど示した「悩みや心配事は友人や仲間のことである」のグラフと重ねてみますと、やはりこれが増えるあたりから急激にこの特別支援学級が増えていることがわかります。

社会全体が流動性を増してくると、組織、制度によって人間関係が規定されなくなるため、円滑に人間関係を紡いでいくために相手の心を読み取らなければいけません。つまり、現代社会というのはお互いにお互いの心をモニタリングしないとやっていけない。そういう社会になってきているわけです。それは学生たち、大学にいる学生たちにとっても同じことであるわけです。

昔から当然、発達障害を抱えていた学生はいたでしょう。また最近は教育支援が進展していく中で大学に進学しやすくなったという面もあるでしょう。しかし、このように発達障害の診断を受けている大学生は今急激に増えてきているわけですね【スライド17】。それはもうみんなこういった問題に敏感にならざるを得ない。そういう状況になってきている面もあるのだらうと思います。

2. 成熟社会の広がり

さらにこの問題をあおっている事態があります。それが世代と世代の問題です。これを成熟社会化という観点から整理してみたいと思います。

近年、薄々お感じだと思えますけども、いわゆる反抗期のない若者が増えているといわれます。これはNHKから切り取って持ってきたんですが、大学生へのアンケート調査、反抗期はありましたかというアンケートで、なかったという学生が半数以上を占めています【スライド27】。実際これはベネッセの調査にも表れていまして、小中高いずれも、親が考えを押しつけてきて困るんだとそう感じる子供たちの数が非常に減っていることがわかります【スライド28】。

そもそも、先ほど申し上げた私たちの人間関係の流動性が増してきた背景には、この価値観の多様化という現象があります。日本人の意識では70年代からだんだんと伝統志向的な価値観から伝統離脱へと、つまり個人個人が自由な価値観を持って、別に伝統に縛られる必要はない、そういった価値観の多様化が進んできたわけです。それを世代別にみてもみますと、古い世代よりも新しい世代の方がこの伝統離脱への傾向が進んでいるわけです。

今10代から20代前半の学生たちは、おそらく新人類ジュニアでしょう。したがってその親御さんたちは新人類に当たります。もうどちらも伝統離脱ですから、親御さんたちも今はもうお子さんたちにこう生きなさい、ああ生きなさいと押し付けない。当然ながら、そこでは一般的に人間関係、親子関係はよくなってくるでしょう。しかし理由はそれだけではありません。かつて戦争の世代が親だったとき、子どもたちは団塊の世代に当たりました。これだけ価値観でギャップがありました。第一戦後の世代が親になったときの子供たちが新人類です。

さらに団塊の世代と団塊ジュニア、段々と親子間の価値観の違いが狭まっていることがお分かりでしょうか。現在新人類と新人類ジュニアも、ほとんど違いがありません。ただ単に伝統離脱が進んでいるというだけでなく、親子間で価値観のギャップがなくなっているわけです。つまり、価値観が世代をまたいでフラット化し始めているわけですね。

これは中高生を持っている親御さんに聞いたものです【スライド30】。1982年と2012年に子供と意見が合わないことはあるか、合わないとすれば何かを聞いたものです。間に30年の歳月が挟まっています。30年でどう変わったのか。一点だけ意見が合わない。増えたものがあります。電話・携帯電話を使うことです。

理由はすぐお分かりでしょう。日本の携帯電話普及率はこのように変わってきました【スライド14】。私たちの国民の50パーセント以上が携帯電話を持つようになっていったのは2000年代を挟んでからです。

今の親御さんたちが思春期だったころは携帯電話一般的ではありませんでした。しかし、今の若者たちの世代はデジタルネイティブの世代です。全く異なった通信環境で思春期を送ってきているわけです。当然ながら親子間で価値観のギャップは広がっていくでしょう。

ところが、それ以外、言葉づかい、学校のこと、あるいは髪型服装、友人のこと、先生のこと等を見てみると一般的な生活態度については親子間でギャップは減っていることがわかります。意見が合わないことが減っているんですね。なぜなのか。今の携帯電話と同じ理屈で考えてみたいと思います。

もう一度使いたいのが先ほど示した日本の経済成長率です【スライド15】。日本の経済成長率は三段階で落ちてきたという話をしてきました。実は82年の調査の時の親子と、

2012年の調査の親子とでは、経済成長率がまるで違う時代なんですね。

もう一度、先ほどのこの山登りの図で考えてみたいと思います。日本の社会は時間の経過とともに高度成長、安定成長、低成長と山を登ってきました。仮に1957年にある御嬢さんがいたとします。15歳の御嬢さんがいたとします。この御嬢さんが成長していった、仮に25歳で結婚してお子さんを設けたとします。さらにこの時生まれた赤ん坊が成長していった15歳を迎えたとします。それが実は第一点目の調査時点82年になります。お母さんが15歳だった57年とお子さんが15歳を迎えた82年では合わせて25年の歳月が流れています。

さらに82年で15歳だった御嬢さんが成長していきます。近年は晩婚化しているのでここでは仮に30歳で結婚しお子さんを設けるとしてみたいと思います。この時に生まれた赤ん坊がさらに成長していった、15歳を迎えたのが実は二つ目の調査時点になります。2012年なんですね。晩婚化している分だけ年齢の幅を広げました。ここでは30年を取っています。親と子の年齢の幅は今の方が広がっています。晩婚化しているからです。

しかし、見てお分かりのように、82年の時には親が15歳だった57年とそのお子さんが15歳を迎えた82年ではこれだけ社会は大きく変わっていました。社会は成長していたからです。ところが、現在はそうではない。親が15歳を迎えた82年と子供が15歳を迎えた2012年ではこのぐらいしか社会は変わっていません。当然ながらその分だけ価値観のギャップは減ってくることになります。

単純化して言えば今の親御さんたちが思春期だったころと今と社会状況はそんなに変わっていないということです。同じような社会で成長してきているということです。唯一変わったのが通信環境です。これは2000年を挟んで大きく変わりました。したがってそこだけは大きくギャップが広がっていますがそれ以外はしたがってギャップがなくなってきていると考えることができます。

という話をしますと、これはなにも親子間だけの問題ではない、学校の教員と生徒の関係についても同じことが言えるでしょう。実際、中高のデータですけども担任の先生は自分のことをわかってくれるのか、今そういう風を感じる子供たちは増えてきています。これが象徴的に表れてきているのが校内暴力の数です。折れ線で示しているのが校内暴力の数です。棒グラフで示しているのが校内暴力で補導された子供の数です【スライド32】。このようにいずれも減ってきています。減ってきていますが、同時にギャップもなくなっていることに目が行くと思います。かつてはこれだけギャップがあったんですね。

なぜギャップがあったのか。かつての校内暴力は子供たちが集団で行っていたからです。つまり、一件の校内暴力でござり子供たちが補導されたわけです。だからこれだけギャップがありました。背景にあったのは子供たちの学校文化、教師に、あるいは社会に対する反感、反発でしょう。だから当時の子供たちは徒党を組んで、みんなで集団で学校の窓ガラスを割って回ったりとか、していたわけですね。ところが今はもう減っているだけではなく重なっています。

今の校内暴力はほぼ単独犯ですね。個人で一人で我慢をこうため込んで我慢をちょうど幼い子が癇癪を爆発させてしまうようにパーンとはじけてしまう、そういうタイプのものになってきているわけです。したがって補導した補導された子供の数と事件の数とはほぼ重なってきてしまっているんですね。

これが意味しているのは、いわば若者世界の中からカウンターカルチャーが、対抗文化が消えてきているという事実です。そういう観点から見れば、今もう一個の大きな変化である暴走族といわれるものの激減というものも理由はお分かりになるかと思います。

という話をすれば、それは大学についても同じなんですね。こういった学生たちの反旗というものは、近年ではすっかり影をなくしてしまいました。いま、学生たちが教師に期待をするのはむしろ懇切丁寧な指導です。自主性に任してほしいというよりも教員に丁寧に指導してもらいたいという大学生が増えてきています。

こうしていれば世代間のギャップが大きくなってきました。その結果、若者たちの青少年犯罪も激減しています。世の中は平和になってきました。よいことのように見えます。しかし、これはいわば学生コミュニティという観点から見たときには、同時に大きな問題をはらんでいます。つまり、今、学生たちから大人社会という共通の敵が消えてしまったわけです。その分だけ、実はお互いの世代の中の細かな違いが、昔以上に目立ちやすくなってきています。これが今学生たちの関係のリスクをあおっているんですね。

例えば、こういう問題で考えてみたいと思います。近年アメリカで共和党と民主党の仲が非常に悪いといわれます。実際調査で比べてみますと 90 年代と比べて 2000 年代は平均的な共和党员、民主党員の意識が分裂してきています。当然、理由はいろいろあると思います。一つの理由として考えられるのは共通の敵であった東側が崩壊をしてしまい、したがって共通の敵を失ったというのが、大きなバックボーンとして考えることができるでしょう。おそらく同じことが規模は違うといえども、今の若者たちの世代でも生じているはずなんですね。世代間ギャップが少なくなってきた分だけ、世代内のギャップが昔よりも大きく目立ちやすくなってきているということです。

それがきれいにれているデータがあります。今、子どもたちが悩み事を誰に相談するかです。これは中学生のデータです【スライド 35】。今、お母さんに相談するという中学生が増えてきています。友達が減ってきています。今拮抗しています。中学生、第二次反抗期だったわけですから、かつてはお母さんというのは反発の対象でした。しかし今はそうではない。お話をしてきたようにむしろ自分と共感してくれる相手と思っている。

友達は当然、同じ世代ですから共感してくれる相手です。しかし、それは今お話ししてきたようにリスクを払った関係とも感じているわけです。そうするとまじ本音を友人に話してそこで友人関係が傷ついてしまってはまずい。したがって、そういったことはお母さんに相談をするという中学生が増えてきています。高校生を見ますと、さすがに友人が多いですがそれでも傾向としてみるとお母さんが増えて、友人が減っていることがわかります。

ちなみに昨年でしょうか、大学の生協連合が行った調査を見ますと、同じ傾向が今、大学生にも表れているようで、相談相手は親だ、学友よりも親だという学生が増えているといわれています。同じ傾向は、おそらく数は違えといえども、大学生にも言えるのではということです。

そうしますと世代間の考え方が大きく変わってくるんですね。これは大学を出た後の新入社員に聞いたものです【スライド 36】。理想的だと思う上司、先輩はどういう人だと思うか。

まず、現在の上司や先輩に聞いています。今の上司先輩は当然自分が若かったとき、自

分が新入社員だった頃を思い出してこの理想的な上司とはどういうものを答えるわけです。そうしますと一番多いのはやはり仕事を任せて見守る上司先輩でした。それはおそらく自分が新入社員だったときそう感じていたからでしょう。つまり、上司先輩はうっとうしいものであると。だからあまりにも身近にいてほしくない、ある程度距離を取って見守って、仕事は任してくれる方がいいんだと感じていたはずなんです。

一方、人間的なんか関係ないよと思っていた、それは上司先輩というのは地位の、社会的地位の問題ですから、個人的魅力の問題なんて関係ないだろうと思っていた。ところが今の新入社員の傾向を見てみますとまるで傾向は変わってきているわけです。ちょうど反対なんです。仕事を任せて遠くから見守ってくれる上司先輩というのは、人気がないんです。むしろ、仕事について懇切丁寧に指導してくれる、そういう上司先輩が望ましいんだという新入社員が、急激に増えていることがわかります。

一方、一番多いのは、やはり人間的な魅力です。それは上司といえども、人間として基本的にフラットだと思っているからでしょう。したがって、個人の人間的魅力の方が大きなウェイトを占めているということだと思います。

こうして、言ってみれば学生たち若者たちにとっての理想が変わってきた。人間関係について言うならば、固定的だった組織、制度から自由になりたいという思いよりも、むしろ流動性が高まってきている中で、自由はある程度デフォルトですから、その中で自分がどうやって周りから受け入れられるだろうか、人間関係を確保できるだろうか、この承認という問題のウェイトがだんだんと高まったと考えることができるでしょう。

我々が若いころを考えてみれば、人間関係を強制される不満を強く抱えていたと思います。組織、制度によって、あるいは地域、あるいは近所とか、あるいは親族共同体でもいいですが、そういったものから人間関係を強制される不満を強く抱えていた。

しかし、近年ではこれは弱まってきている、むしろ、自分だけが人間関係から外されるかもしれない不安を大きく抱えるようになってきている。おそらく学生コミュニティの世代内の人間関係においても同じことが言えるかと思います。組織制度によって関係は強制されないわけですから、その不満は減ってきているわけですが、しかし、その裏では自分だけが仲間から外されてしまったらどうしようという不安感が強まってきている。こういうおそらく変化がみられるのではないのでしょうか。

これを、いま申し上げたもう一個の論点、世代間の問題でいうならば、おそらく私たちが若いころは、上の教員から、あるいは親でもいいですけども、そういった大人から自分たちが見られているかもしれない不満を大きく抱えていたと思います。

しかし、いまはそうではない。自分はちゃんと教員から見てもらっているんだろうか、自分は親から愛してもらえているんだろうか、そういう不安の方がだんだんと強まるようになってきているのではないのでしょうか。

もちろんこれは不満が不安に入れ替わったわけではないでしょう。今だって不満を抱えている若者はいるはず。しかし、ウェイト、比重の問題と考えるとだんだんと不満のウェイトは下がり、不安のウェイトが上がってきているのではないだろうか。そうすると、表に出てくる理想の形態は、自由よりも承認になってこざるを得ない。だから今の若者にとって一人でいることの意味合いが変わってきているのだと思います。

我々が若いころ、一人でいると一匹狼といわれて、カッコいいとすら思われる時代もあ

りました。それは組織、制度に縛られない自由の証だったからです。しかし、今は一人でいるとぼっちといわれて蔑みの対象となってしまう。それは今お話ししたような社会的な変化が背景にあるからだと考えることができるのではないだろうかというわけです。

ではそういう変化の中で今若者たちが、どういう人間関係を日々営んでいるのだろうかというところに、話を進めていきたいと思います。これを内閉化という観点から整理を試みたいと思います。

3. 内閉化する生活圏

先ほどは人間関係の流動性が進んでいると申し上げました。当然ながら流動性が高まってくると付き合い方が変わってきます。かつて、人間関係が固定的だった時代、私たちはいわば否応なく、好き嫌いににかかわらず、全人的な、つまり包括的なかかわりをせざるを得ませんでした。それは人間関係が固定されていたからです。

例えば友人でいえば、親友というのは何でも知っているというのが親友だった。例えば、成績を知っていれば、彼女彼氏のことを知っていれば、家庭環境も知っていれば、何でも知っているのが、内面も知っているのが、友人だろ親友だろという感覚を持っていました。それは関係が固定されていたからです。つまり、親密な相手のことはどうしても何でも知らざるを得ない、そういう状況にありました。

しかし、近年、状況は変わってきているわけです。人間関係の流動性が増してきているということは局面、局面で付き合う相手が自由に切り替えてくことができる、そういう状況がだんだんと今強まってきているわけです。そうすると包括的な関与というのは前提ではなくなってきます。選択的な関与でOKであるわけです。

一般に、これが世代間の中で誤解されやすいんですね。今の若者たちは人間関係が希薄化しているとよく言われます。それは、我々にとってみれば包括的な関与は前提だからです。そういう観点からみると、今の若者たちの選択的な関与は、なにか人間関係が希薄化しているように見えてしまう。

しかし、実は彼らはそうは思っていないんですね。局面、局面で付き合う相手は切り替えられるわけですから、そうするとその局面において必要な情報だけで、十分に親密な関係を装うことはできると感じている。つまり、これは親密性のモードが、中身が変わってきているんですね。別に親密ではなくなってきた、薄くなってきたというわけではない、切り替えが可能になってきたということなんですね。

それを象徴している言葉があります。まず、高校生の言葉ですね。高2の言葉です。高2の女子です。「友達を使い分けています。一緒に勉強する友達、将来の話をする友達、校外活動を共にする友達。局面において最適な友達を選んでいる。嫌な人は切ってしまう。」こうして局面によって友達を使い分けるという傾向は、この女子だけの特徴ではありません。我々、社会学者が行った調査を見てみても、遊ぶ内容で一緒に遊ぶ友達を使い分ける傾向は、もともとこの調査は2000年以降なので数が多いんですが、それでも今さらに増ってきています。使い分け傾向がこのようにデータを見ても増ってきているんですね。

人間関係を使い分けるわけですから、当然そのためにも多くの関係をプールしとかないといけない。冒頭でお話をしたように、今若者たちの友達の数膨らんでいます。多く

なってきた、一般的には平均値は上がってきています。では、友人関係の範囲は広がっているのかというと、実はそうではないんですね。

今度は高3男子です。「友達とは上手に付き合いたい。共感するならシェアするけど気が合わなければ、付き合わなければいい。だって喧嘩をしたくない。喧嘩をするくらいだったら最初から付き合わなければいい。」こうしていれば関係の住み分けも同時に進んでいる。つまり、自分と同じような価値観、同じようなものの見方、あるいはもっと言えば同じような生活環境を送ってきた人と関係を紡いでいった方が衝突しないで済む、そういう傾向が進んできている。

そうすると、当然ながら友人と知り合う場所は狭くなってきました。実際調査で聞いています。これは友人と知り合った場所を調べたものです【スライド43】。いろいろ聞いています。学校のクラス、部活、あるいはゲームセンター、塾、いろいろな、ネットも入っています、いろいろな場所を聞いています。でその平均値をとったものです。ご覧のように減ってきています。つまり、子どもたちの友人を作るときの行動半径は、むしろ今は狭くなってきていることがわかります。

つまり、関係の流動性が高まっていく中で、少しでも安定した自分の関係を確保するために、分断化とその中での同質化が進んできていることがわかります。

そういう観点から整理をし直してみますと、先ほど示しました日本人の価値観が伝統志向から伝統離脱へと変わってきたデータ【スライド29】も、よく見ると実は2000年以降、反転現象が生じてきている意味合いがなんとなくわかってきます。

近年のデータを見てみるとこうなっているんですね。流動性の高まりに疲れてきた。その中でむしろ、ある程度枠組みがあった方が生きやすい、そういう傾向が若者だけではなく日本全体で進んできている現象なんでしょう。

近年グローバル化に対するいろんなバックラッシュが生まれています。イギリスのEUからの離脱、トランプ大統領の誕生等々を考えてもおそらくこういったバックラッシュがいろんなところで生じているのでしょう。そういう観点から、もう一度若者たちの人間関係を見てみたいと思います。

あまりいい例ではないかもしれませんが、いろいろな鬼さんが檻の中にいるとします。この時に関係をつないでおくというのは、自分と少しでも似通った鬼さんをグルーピングするということですね。こうやって、いわばリスクヘッジをするようになってきている。何のリスクか。先ほども申しあげました大学というなら、キャンパスの中で自分だけがぼっちになるかもしれない、そのリスクを下げるんですね。

こうやって作られたグループを、今、若者たちは「いつメン」と呼ぶわけです。いつも一緒のメンバー、いつも一緒のメンツですね。私たちはいつメンと聞くといつも一緒のメンバーなのだから、きっとそれは親友なんだろうと誤解をしがちです。もちろん、いつメンのなかに親友を見つけられたラッキーな若者もいますが、しかし逆も真とはいえない。いつメンだからと言って、それが必ずしも親友であるとは限りません。なぜならば、今お話したように、キャンパスの中で自分だけがぼっちにならないようにリスクヘッジの手段だからです。

言ってみればこれは保険なんですね。お互いにボッチを避けあうために保険をかけあっているんですね。こういった人間関係、保険的な人間関係が広まってくれば、当然ながら

関係の作り方は変わってくることになります。

保険ですから、そこには掛け金が必要です。ではいつメンの掛け金はなんだろうか。人間関係ですからお互いに配慮をしあうことですね。今若者たちはこのお互いの配慮のしあいを、キャンパスの中だけではなく、今はネットがありますから、スマホを使い、ラインを使い、日々、行っているわけです。

そうすると、この関係の作り方は深入りをしてはならない保険的な関係ですから、もしも意見が合わなかったときは納得いくまで話し合いをしてはまずいということになります。そんなことをしては関係が破綻してしまうかもしれないのでなるべく深入りをしないようにする。そういう関係がだんだんと広まってくるようになってくるわけです。

このような観点から考えてみますと、このいつメン的な人間関係というものは、ジグソーパズルのようなものに例えて考えることもできるでしょう。ジグソーパズルというのは一つ一つのピースの形は全部違います。違いますが予め全部決まっています。決まっているからこそ、私たちは安心して、パズルを楽しむことができるわけです。考えてみれば若者たちのいつメンの人間関係も、このジグソーパズルのようなものなのです。ここで期待されているのは予定調和の関係、安定した予定調和の関係です。ジグソーパズルが「いつメン」だとするならば、このピースの一個一個は一人一人の学生になるでしょう。

そうはいつても人間ですから、こんな単純なピースの輪郭をしているわけではないでしょう。私たちの人格はいろいろな要素から出来上がっています。今のピースでいうならば、いろんなピースで私たちの人格は出来上がっている。一般的に個性といわれるものはこのピースの全体集合であるはずで、それが我々の個性を作っているはずで。

しかし、このピースの全体集合で仲間と付き合っていると、当然ながら今、リスクは高まっていますから、相手と衝突をする機会は増えてきます。このリスクを避けるためには何が大切か。ピース全体では付き合わない。特定のピースだけを切り出してきて、自分という人物像を平板化して、単純化して示す。これが今、若者たちがよく使うキャラというものです。

したがって、キャラ化というのはよく個性の表現のように誤解をされがちなのですが、実はそうではない。個性を打ち消すことによって人間関係を円滑に回していく工夫が、キャラ化というものであると考えることができます。

キャラというのはキャラクターの略ですよ。キティちゃん、ミニーちゃんのようなキャラクターを思い出してください。特徴はなんでしょう。油絵のようなキャラクターは存在しません。だいたいキャラクターというのは、必要最小限の単純な線で特徴をクリアに表したものです。つまり単純化して示したものがキャラです。

人間のキャラも同じなわけです。いろんな要因を剥いでいって、自分という人物像を単純化、平板化していきます。だからこそ人間関係の見通しが良くなるわけです。僕はこういうキャラだから、こういう場面ではこう振る舞う。だったら彼はああいうキャラだからああ返してくるだろう。だったら僕はこういうキャラだから、次にこう返せばいい。こうして、人間関係は円滑にぐるぐると回っていくことになるわけです。

ところが、この時にもう一つ条件が必要です。円滑に回していくためには、人間関係の見通しをよくするためには、お互いのキャラをちゃんとわかっていなければなりません。つまり、キャラが勝手に変わってしまってはまずい。関係の中で初期設定されたキャラは、

変わってはまずいんですね。つまり、初期設定されたキャラは固定的でなければならない。

だから今、若い人たちはキャラ変が大変だといいます。なぜキャラ変が大変だというのか。それはキャラは本来、関係の中で変えてはいけないものだからです。

こうして固定化された中で、人間関係はだんだんとうとうしいものになっていく面もあるんですね。これはスペック式と言い換えてもいいでしょう。ちょうど電気製品のスペックを合わせるようなものです。

電気製品のスペックというのは、だいたい買った時から変わりません。だんだん古ぼけていって、性能が落ちていくことはありますが、しかしスペック自体は本来変わらないものです。同じように固定化された人間関係をキャラの中では営んでいるわけです。

例えば自分という錠前があったとします。そうすると自分という錠前にぴったりと合う相手はどういうやつなのか、という探し方をするわけですね。お互いにつきあう中で変わっていくという発想はない。これはおそらく、今の若者たちの恋愛関係を考えてみると、一番よくわかりやすいかと思います。

例えばこういうものがありました。29歳の男性です。とりあえず事の善悪は置いておいてください。風俗店に行きますといっているので性欲がないわけではないのでしょう。しかし、恋愛はいらないし、好きになる女性もいない。だって2年3年と付き合って別れたりしたら損じゃないですかというわけです。結婚願望はあるからいずれ婚活はするという。しかし付き合わない。なぜならば2年3年と付き合ったならば損だからと言っているわけです。

男性だけではなくありません。女性です。以前付き合っていた彼のために仕事をセーブしてつくしたけれどダメになった時、手元に何も残らなかった。同棲までした彼とは結局結婚に至らず、これほど無駄な時間はないと思ったと語っています。結局結婚に至らなければ無駄でしょと言っているわけです。

このようにスペック主義では、お互いに付き合っていた時間そのもの、プロセスそのものに価値があったと思えないわけです。最終ゴールに至るかどうかが問題であって、その中で自分たちが変わっていく、成長していく、変化をしていくプロセス自体には価値を見出せない。それは固定されたスペック同士が付き合っているからです。こういう条件の人間とこういう条件の人間が出会い、付き合うというわけです。

たまに今はやっている婚活なんかにもいまそういう傾向がありますよね。条件だけでマッチングさせていく。お互い付き合っていて変わっていくという発想ではない。

この固定化こそが、変化するということに対してリアリティーを失わせてしまっている。こうして自己像というものがだんだんと固定化しつつあるのではないだろうかということなんですね。

これを先ほどのジグソーパズルにもう一度戻って考えてみるならば、こう考えてみてもいいでしょう。ここにX軸とY軸を置いてみるとします。そうしますとこのピースの座標はこうなります。Xの2,Yの2ですね。いわばこの座標を示すもの、これがキャラなんですね。このいつメンの仲間の中で、僕の居場所はここなんだよという感じです。誰にも侵害されないここ、安定した場所なんだよといった、これがキャラなんですね。

したがって、よくいま若い人たちが言うようにこういうピースは嫌われます。忌避されます。それは安定した自分の居場所が確保されないからです。昨今、個性的という言葉が

ネガティブに使われるのはそういう背景があるからです。

ということは、ひっくり返していうならば、外部から僕と全く同じピースがやってくると、それはこの僕のポジションと入れ替え可能ということでもあります。したがって、このピースも嫌われます。キャラかぶり、キャラが重なることをなぜ嫌うのか。それはお互いにキャラが違っていないと自分の安定した場所が確保できないからです。

さらに考えてみると、このキャラの人間関係にとって大切なのは、一個一個のピースのこの輪郭なんです。絵柄はなくてもいいんです。それはこのピースだけではありません。全部のピースに当てはまります。大切なのは絵柄ではなく、周りときちんと輪郭がかみ合っているかどうかです。だからキャラ的な人間関係は、決して個性の表現ではなく、ある意味匿名性を持っているんです。確かに、仲間の中では一個一個のピースの形は違います。その意味では特殊性はあります。しかし、もしも同じ輪郭のピースがやってくれば、僕と入れ替え可能という意味で、単独性は持ち合わせていません。本当にこの仲間の中で必要とされているのはこの僕なんだろうか、この私なんだろうか、必要なのはこういうキャラを備えた、こういうキャラの人物なんじゃないの、そういうキャラさえ演じられるんだったら別の人でも良かったんじゃないの、そういう不安感がだんだんと募っていくことになります。

つまり、かけがえのない自分、代替不能性といったものから、だんだんと疎外をされていってしまう。そうするとかけがえのない自分らしさがあるんだと若者たちが持つことはだんだんと難しくなってくる。キャラというものに縛られていってしまう。そういう傾向がだんだんと増してくるわけです。

渋谷の駅前の近くにこういう記念碑、モニュメントがあります。これはご存知の尾崎豊が生前よくここに立っていたという場所なんですね。そのため、記念碑がここに作られています。この記念碑の周りにかつてのファンたちがいっぱい落書きをしているんですね。こういう風には書いています。僕が僕であるために、自分は自分だから、本当の自分を見つけた、自分の力で生きていく、私は私のまま、などなどです【スライド48】。

かつて尾崎が生きていたとき、ファンたちはどういう思いで尾崎のメッセージ、「僕は僕であるために」に共鳴したのか。それは自分の生き方を社会から強制されない、学校から強制されない、自分で見つけていくんだ、そういう社会的な抑圧からの解放であったはずでしょう。だから若者の代弁者ともいわれたわけですね。

では今の若者たちがこの書き込みを見たときにどう感じるのか。もちろん、この書き込みに共感を覚えないわけではない。しかし、共感の仕方が違う。抑圧からの解放ではなく、キャラに縛られた人間関係の中で、でも僕は僕らしくありたいんだ、そういったいわば縦の関係の抑圧ではなく、横の関係のプレッシャーの中からの、いわば先ほど申し上げた、代替不能性からの疎外です。そういったところから今のメッセージに今の若者たちが共感をする。そういう風に機制の在り方が、仕組みが変わってきているように思うんです。

ではそういう中で今、若者たちはどういう不安を抱え、私たちはどのように向かい合っていいたらよいだろうかというところに、さらに話を進めていきたいと思います。

仲間たちが、不満や不安を抱えるのは当たり前です。それはかつてだって、昔だって変わりませんでした。青年期に不安があるのは当たり前です。しかし、不安の持ち方が変わってきているようなのです。

かつて、青年期の不安とはこういったものが典型的だったでしょう。いったい自分はどんな木になれるんだろう。自分はどんな枝を伸ばし、どんな葉を繁らせていけるんだろうか。どんな人間になれるんだろうか。

これがかつて実存の不安と私たちは言いました。自分の生きている意味とは一体なんなのだろうかと問うたものです。もちろん今だってこういった問いを持つ学生がいないわけではない。しかし、今の若者たちはこの実存の問いに到達する以前の問題として、自分はどこに根を生やしているんだろう、いったい自分はどこに安定して立っていられるんだろう、自分の根っこはどこにあるのか、自分の安定した居場所はどこにあるのか、この言ってみれば存在論的な不安を強く抱えるようになってきている。この存在論的な不安がきちんと埋まらないことには実存の不安にいくことはなかなか難しい。そういう時代になってきているように思います。

つまり、生きる意味を問う以前にまず、自分の生きる基盤、こちらを確保しないと、こちらに安定感を得ないとなかなか実存の不安にたどり着けない。今そういう状況になってきているのではないかと思うのです。

4. 承認不安の超克へ

生きる意味のベクトルは look forward です。それに対して生きる基盤は逆で、look back です。近年は、この look back のウェイトの方がどうも高くなってきている。それは実際に大学生に行った調査にも表れています【スライド 50】。大学生の生活態度を聞いたものです。よい未来を迎えられるようそれに向けて努力をしている。これが look forward ですね。これが 15.9%。それに対して、過去を振り返って色々と思い出しながら日々過ごしているが 25.3%。look back ですね。こっちの方が数が多い。こういう傾向が大学生でも見られるようになってきているわけです。

そういう中で、少しでも安定した人間関係を確保したいと願えば、いつメンだけでは安心できません。もっともっと安定した人間関係を自分のもとにおいておきたいわけです。そこで伝統的な共同体に対する意識が大きく変わっていくんですね。

かつての若者にとってみれば、親族共同体、地縁共同体は嫌悪の対象でした。家族や近隣から離れたい、自由になりたいと思っていた。今はそうではない。家族といるときに充実感を覚えるという若者は今、だんだんと増えていますし、地域が好きだという若者もまた増えている。

それは先ほど申し上げたように、世代間ギャップが減ったという面もあるでしょう。しかし、それだけではないはずです。これだけ急激に増してきている背景にはむしろ、そういった家族や地域の人間関係に自分の安定した場所を見出したい。そういう血縁や地縁に対するある種の憧れも高まっていることが背景にあると考えることができます。

ちょっと余談ですけども、地域で消防団というのがありますね。消防団の隊員は今激減しています。いま、専門職の消防職員が増えてきていて、地元の人たちがボランティアで行う消防団の数が減ってきています。が、実は、唯一増えている年齢層があります。大学生なんですね。大学生の消防団員の数が急激に増えています。おそらく以上のような背景にあるのだと思います。地縁に対するこだわりといったものですね。

そういう風に考えてみますと、例えば今、現在の地域に将来も今後住み続けたい、住ん

でいたいという人がこのように増えてきていることにも納得がいきます。ここにはいま申し上げた地縁、血縁の問題、血縁に対する憧れ、それから地縁に対する憧れ、両方働いているのでしょう。こうして、いわゆる地元志向というものがだんだんと強まってきているわけです。

ただし注意をしないといけないのは、今、若者たちの世界では、同時に人間関係の分断化と同質化も進んできているわけです。つまり内閉化も進んできているわけです。そうすると、地元だからと言って、地元の誰とでも付き合うわけではないということです。若干誤解されがちですが、地元というのは本来いろんな人間がいるので、そこには多様な人間関係があるはずですが、その中で少しでも自分と同じような世代で、同じような価値観の人と関係を紡いでいくようになっている。これを社会学では、漢字を使わずに、カタカナでジモトと言ったりするんですね。漢字の地元ではない。いわば心地の良いジモトですね。環境を閉じた中でのジモト志向がだんだんと進んできているんですね。

これが人間関係だけではなく、学生たちの生活態度あるいは価値観、期待値といったものにも大きな影響を与えていくことになります。

近年言われているこういうデータを紹介してみたいと思います【スライド 54】。貧困率です。男性の貧困率は 80 年代に、このようにカーブを描いていました。貧困率が高いのは高齢者でした。近年どうなっているか。もちろん下流老人といわれるように高齢の貧困者もいます。いますが今、貧困率が高まっているのは若年層ですね。このように 2000 年代ですと 10 代から 20 代、若年層の貧困率の方が、高齢者よりも高くなってきている。若者の貧困、子どもの貧困がクローズアップされる所以です。

女性を見てみますと、女性のものにもこのように 80 年代は同じカーブを描いていました【スライド 55】。近年は女性はやはり高齢層も高いんですが、やはり若年層で上がっている点は同じです。若年層の女性もこのように貧困率は上がっているんですね。

そうすると、こういうデータにこれが反映してきます【スライド 56】。いくら努力しても報われないことが多いと思う。80 年代と 2013 年を比べてみますと、このように全体としては増えているんですが、まず男性を見てみましょう。先ほどの貧困率の変化を考えてみてください。若年層が大きかったですよね。同じようにグーッと若年層の方が報われない感が増えてきているんですね。女性の場合には高齢者も貧困率高いままでしたから、女性の高齢者の報われない感も高まっています。でも、若年層でもまたこのように報われない感が高いのがわかります。

一方、冒頭に示した生活満足度のグラフです。70 年代と比べて、2000 年代は、若年層の方が貧困率は高まっているわけですから、本来なら生活満足度は若い層の方が下がっていて然るべきです。ところが、冒頭でお話をしたように、現実のデータはそうではありませんでした。このように逆転をしているんですね。これをどのように理解、解釈すべきかというのが問題です。

2000 年代の生活満足度と【スライド 3】、この経済成長率【スライド 15】とを重ねて考えてみたいと思います。

ただ横軸だけが違うのでこのままでは重ねることができません。経済成長率は年代別ですから。そこで、この生活満足度を反転させます。そうすると重ねて考えることができます。つまり、ここは 2008 年の 16 歳で、ここは 2008 年の 75 歳ですから、2008 年の 75 歳

の人が16歳だったときは、遡っていくと1949年になります。そうすると背後にある経済成長率と重ねて考えることができます。

つまりこのグラフはそれぞれの年に16歳だった人が、2008年の時点でどれだけの生活満足度を示していることになります。

そうしますと理由が分かります。つまり我々の若い頃が高度成長期でしたから、この希望という菓を一杯飲んできた世代であるわけです。しかし、今現在はこのようにグーっと成長率が落ちている。期待値がそもそも低いんですね。

私たちは期待値と現状との差に不満を感じるわけですから、期待値が下がっている分だけ満足度が上昇して行くことにもなります。相対的なんですね。こうしておそらく若い世代ではだんだんと生活満足度が上がってきているというのが、まずは言えることではないでしょうか。

ただ、それだけだとちょっと足りないと思いますね。これほど急激に生活満足度が上がってきているのには、もう1つ大きな要因があるのではないだろうか。今日お話をしてきたように、仲間関係の内閉化が重ねて起きたからでもあるからだと言えることができるのではないのでしょうか。

貧困率が増してきているということは、貧しさと豊かさの格差が拡大しているということです。今、社会の中は貧しい人と豊かな人が混在しているんですね。しかし、その中でも生活圏が内閉化していると申し上げました。ということは、言ってみれば、両者の間にも分断線が走っているということです。

一般的に言われること、それはやっぱり恵まれている人たちには恵まれていない人たちの世界が目に入ってこないということです。例えば、大学に進学をした学生たちに「大学進学できなかった子のことをどう思う?」と尋ねると、こう言う人たちがいます。「それって自己責任じゃないのか」と。「俺たちは一生懸命に勉強して大学に入ってきたんだから、勉強しなくて大学に入って来られなかったのはしょうがないだろう。それは自己責任だよ」と。

これは、貧困の中で大学に入るために勉強したくてもそういう環境になかった子たちのことが見えていないということで、よく指摘されることでもあります。

しかし、実は同じことは逆についても言えるわけです。こっちから見た時も環境は閉じているわけですから、こっちは目に入ってはいなくなっています。先ほどから申し上げてきたように、同じような生活環境を抱えた仲間と閉じているからです。そうすると、こっち側が見えていないので、調査をしてみると、実は学歴が低い若者に、現状を肯定する人たちが多く、その結果、格差を肯定してしまうという傾向も見受けられるのです。

先ほど少し申し上げましたように、不満というのは、期待値と現状とのギャップから生ずるものです。例えていうならば、学生たちがテストで80点点数を取りたいと思っていた。でもテストが返ってきたら70点だった。この差に学生が不満を感じる、足りないわけですから不満を感じるわけです。ここから現状が悪化するということは、この70点が言ってみれば60点になるということです。当然不満は募ってきます。差は広がるわけですから。

しかし、この時に最初から期待値が70点だったら、不満度は先ほどと同じになります。70点だと期待していたら60点だった。すると差は10点だからです。さらに、そもそも

期待値が60点だったら、点数は予想した通りですから、それなりに満足なわけです。さらにさらに、今回のテスト俺失敗したなと思い、期待値は40点だった。ところが答案が返ってきたら60点だった。すると、おーやったぜと思うわけですね。大満足です。60点という点数は変わりませんが、期待値が変化することによって、捉え方は大きく変わってくるわけです。このような心理的な機序が、生活満足度にも反映しているのではないのでしょうか。

73年のグラフと2008年のグラフ。どちらもよく見てみると、50歳代、60歳代からあとはもう傾向はほとんど変わっていません。だんだんと右肩上がりです。それは、この期待値とのギャップがほとんどなくなっていくからです。私も50代後半ですから実感としてわかりますけれども、現状への不満というのは人生の期待の裏返しだからです。歳を取ればもうそんなに人生に期待しなくなっていくので、だんだんと満足度は上がっていくわけです。

そういう観点から見てみれば、73年のこのグラフ、これはノーマルなんですね。75歳の爺ちゃん婆ちゃんよりも、若い人の生活満足度がみんな低いのは当たり前なんです。実際、現在アメリカで行われた同じような調査を見ると、73年の日本と同じカーブを描いています。こういうカーブをアメリカでは今も描いているんですね。

ところが日本は違う。現在はこのように変わってきています。75歳の爺ちゃん婆ちゃんと比べたときに、今の30代40代がほぼイコールですね。これは先ほどの話を考えてみれば、日本の成長率がどんどん落ちてきていることによって説明できるでしょう。

しかし、10代のこの異様な高さは、おそらくそれだけでは説明しきれない。もう一つの要因が必要となる。それこそが、いま申し上げてきた生活圏の内閉化という事態ではないのでしょうか。

以上は2008年までを比べたものですが、どうもそこで事態は収まっていないようです。これは生きていけばよいことはあるはずだと思える人の割合を年代別、年齢別に見たものです【スライド56】。2008年度の時点は、ほぼ横ばいでした。去年の最新のデータはどうなっているか。若い人の方が下がってきていますね。生きていても、よいことがあるとは思えない。こうしてさらに、期待値がしぼんできているように見えます。つまり、人生観がシュリンクしているのではないだろうか、もっと言えば、人生は自分の人生は自分で切り開いていくというよりも、何か運命の糸のようなもので操られている、そういう思い、そういう人生観がだんだんと広がっているのではないだろうか。私はそのように感じています。その点について最後に少し触れておきたいと思います。

おわりに

社会学で最近よく言われる現象があります。再魔術化という現象です。近代がだんだんと飽和してくる中で再魔術化が進んでくる。もちろん新しい現象ですから、昔と同じものではありません。形を変えてこういったようにいろんな形を取りながら、しかし、再魔術的なメンタリティーはだんだんと強まってきているということがしばしば言われます。

実際、今10代の若者では、信仰を持つ割合が急激に増えています。これはいわゆる伝統的な教団信仰だけではありません。いわゆるスピリチュアリティといわれるようないろんな新しいものも含まれています。実際こういったデータを見てみますと、そういった傾

向がよくわかります。あの世や来世を信じる若者、あるいは奇跡を信じる若者、おみくじや占い、そういったものもこのように近年グーッと上がってきていることがわかります。いわゆる伝統宗教というよりはスピリチュアリティのようなものなのです。

例えば、自分にはどういうオーラがあるんだろうとか、自分の前世はなんなのだろうとか、その自分の前世が今の人生を規定しているのだろうといった思いですね。そういう感覚がだんだんと強まってきている。

例えば、お守りやお札を身の回りにおいて信じるという者は、70年代にはこういう分布を描いていました【スライド61】。若い人は信心深くなく、お年寄りには信心深かった。それが70年代の常識でした。

ところが、近年は大きく傾向が変わっています。今や信心深いのは若者です。一方、今の高齢者層は70年代に合理化され、近代化された世代ですから、今はそんなに信心深くはない。こうして逆に若い人の方に信心深い人が増えている。これが再魔術化といわれる現象です。こういう新しい現象が生じてきている。

もちろん、みんながみんなそうというわけではありません。そんなの迷信だよ。俺はもっと科学的だよという若者もいるでしょう。しかし、そういう若者たちは、こういった脳科学のようなものに関心を示している。もちろん、脳科学は脳の可塑性にも着目しています。しかし、一般的に広まっているポップ化された脳科学では、生まれ持った脳の資質があって、それがその人の生き方を決めているんだといった見方がされやすい。そういった考え方を信じがちになっている。これは形を変えた再魔術化です。スピリチュアリティ、あるいは脳科学、これらを通して再魔術化といった現象が見られるようになってきているのです。

これが人生観に大きな影響を与えています。World Values Survey のデータで、勤勉よりも運やコネのほうが人生の成功にとって大切と思う日本人の動向をご覧ください【スライド62】。もともと日本人は勤勉な民族といわれてきていたんですけども、どうも2000年に入ってから傾向が変わってきています。勤勉よりも運やコネが大切だ、そういう日本人が急激に増えてきている。勤勉というのはいわば私たちが努力して身につけるもの。つまり、これは獲得属性です。

それに対して、運やコネというと、それは偶然だよなと思いがちですが、いま申し上げたように再魔術化が進んできている中で考えると、運やコネというの、決して偶然ではない。先ほど申し上げたように、自分がどういう前世を背負って、どういうオーラを持っているかというのは、運ではないからです。ある種、必然なんですね。そうすると、運やコネは、生得属性に変化します。つまり、自分の生まれもったものが自分の人生を決めている、自分の生まれ持った素質、才能、資質が自分の人生を決めるんだ、そういった感覚です。そういう思いがだんだん強まってきている。

そして、どうもこの傾向は世代別にみると、若い人の方がやはり激しいようなのです。同じような調査で世代別のデータを見てみると、人生の成功において大切なのは努力よりも運やコネであると考えている者は、やはり20代30代に多いのです。自分が生まれ持ったもの、近年ではこれをよく本質主義という言葉で表現しますが、自分の生まれ持った本質が、つまり獲得されたものではなく本質的に備わったものが自分の人生を決めていく、そういう風に感じる傾向が、だんだんと強まっているようなのです。

先ほど私は、70年代と比べて2000年代にこのように若い人ほど生活満足度が上がってきているのは、この経済成長に加えて、生活圏の内閉化があるからではないだろうかと思いましたが、さらにここにプラスして、この本質主義の要因も付け加えてもよいのではないかと思います。これが若い世代の期待値を下げていると考えられるのです。

もちろん、この本質主義の背景にあるのも、この生活圏の内閉化でしょう。自分の地縁共同体、血縁共同体というものに強い思い入れを持っているわけですから、自分がどういう生まれなのか、その生まれによって自分の人生は決まっていくんだ、そういう傾向が強まってくる。それが本質主義につながっているのではないのでしょうか。

そういう風に考えると、これは今の若い人たちの閉じられた関係という問題に還元して考えることもできると思うんです。そういう中で今、私たちは、学生たちの教育をしていけないといけない状況になっているのではないかということを描きたいのです。

例えて言えば、このような何か希望の種があったとします。これがだんだんと膨らんでいって、もっともっと膨らんでいって、火だるまのようになってしまった。それがかつて私たちが若いころの状態でした。だから、我々の世代は欲望がどんどん煽られていた。今現在、50代60代の世代はおそらくそうでしょう。そのため、今日本の犯罪率を見ると高齢者だけは下がっていません。高齢者の犯罪は多い。それは期待値が高いままなのに、現実の社会はもうそれを許す状況ではないからです。だから、期待値の高さと現実とのギャップが大きな不満感をもたらしている。この不満感は、高齢者ほど強く抱えているというわけです。

でも若い人はそうではない。そもそも期待値はもう下がってきているので、このような火だるまにはなっていない。こうなってきた…であればよかったはずなのですが、実はここで止まっていない。これがさらにしぼんでいるんですね。人生観がシュリンクしている。その背景にあるものこそ、この生活圏の内閉化という現象ではないのでしょうか。

だとすれば、これをどうやってもう一度この程度くらいに戻してやれるのかというのが、おそらく今、我々教員に課されている課題ではないかと思うんです。

つまり、今の学生に与えるべきなのは、知識は当然ですが、その知識を使って、彼らの閉じた世界をどうやって開いていけるのか。彼らのしほみすぎた期待値を、どうやって引き上げ、この成熟社会に見合った程度まで戻してやれるのか、そのインテンシブでしょう。そういう、いわば知識の使い方を、私たちは今、学生たちに教育しないとけない時期になっているのではないかと思います。

それは特に初年次の教育においては大切でしょう。まだ専門分化していく前だからです。いろんな学生がまだ混ざっているときに、専門知識ではなく、そういった知識の使い方のようなレディネスを持たせることが、おそらく大切だと思うんです。

いろいろな志向性をもった学生たちが、一緒に初年次では教育を受けることになります。その中で、お互いに刺激し合いながら、どうやって自分の期待値を、あるいは世界観を広げていけるのか、そういった態度の形成こそが、おそらく今、初年次の教育に求められている中身ではないかと思います。

それをさらに広げて考えてみれば、まさにこの分断化された社会の中で、この二つの世界をつなげていく、橋渡しをしていく、これがおそらく大学で教育を受けた者に、今後は求められていく役割のはずだとも思います。それは、大学の中でもそうですが、大学を出

た後に、社会の中に出た後に果たすべきことで、大学教育に社会が望むものも、おそらくここにあるのではないかと私は考えています。

そういう観点から、学生コミュニティのありようをもう一度振り返り、それを前提としたうえで、初年次の教育はどのようにあるべきかを我々は考えていかなければならないでしょう。

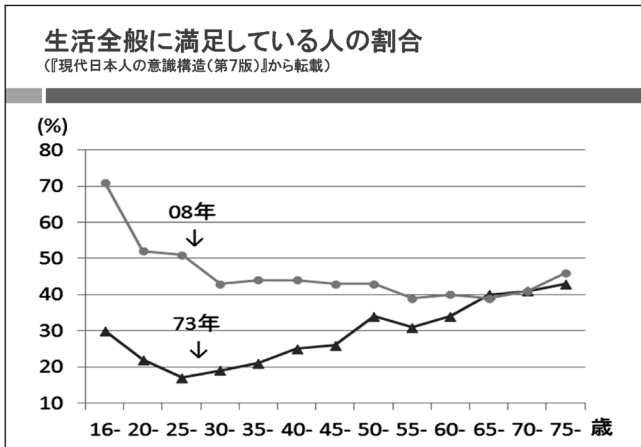
ご清聴どうもありがとうございました。



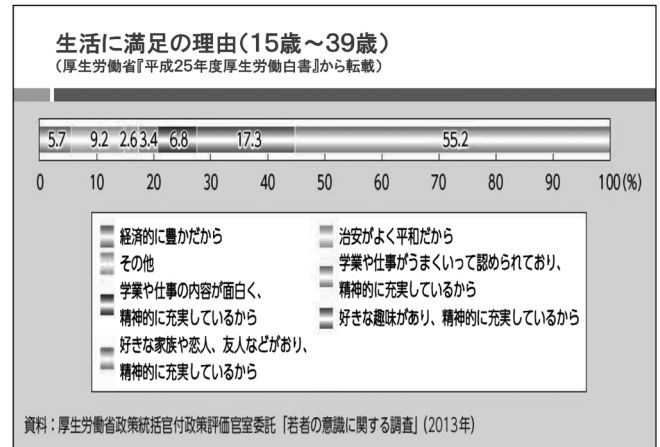
1



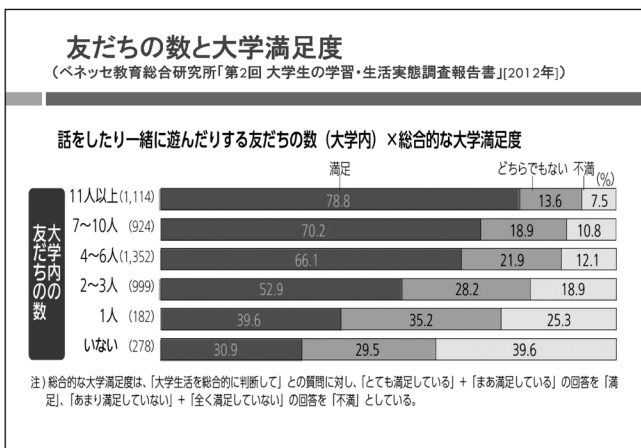
2



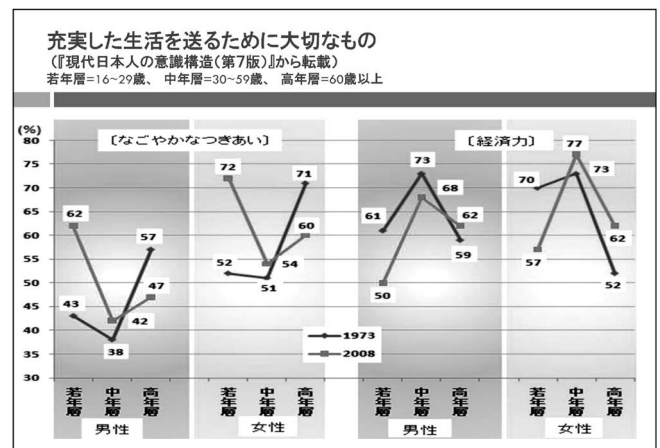
3



4



5



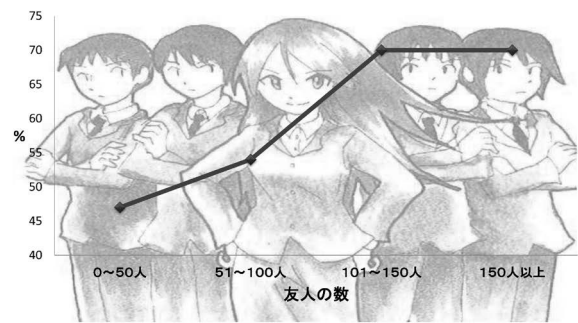
6

充実した生活を送るために大切なもの
 (『現代日本人の意識構造(第7版)』から転載) 若年層=16~29歳

	1973年	2008年
経済力が大切		
男性	61 %	↘ 50 %
女性	70 %	↘ 57 %
つきあいが大切		
男性	43 %	↗ 62 %
女性	52 %	↗ 72 %

7

自分の将来は明るい(16~29歳)
 (青少年研究会「若者の行動と意識に関する調査(2012年)」から)



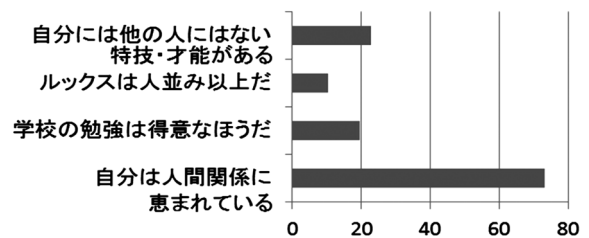
8

1. 人間関係の流動化

2. 成熟社会の広がり
3. 内閉化する生活圏
4. 承認不安の超克へ

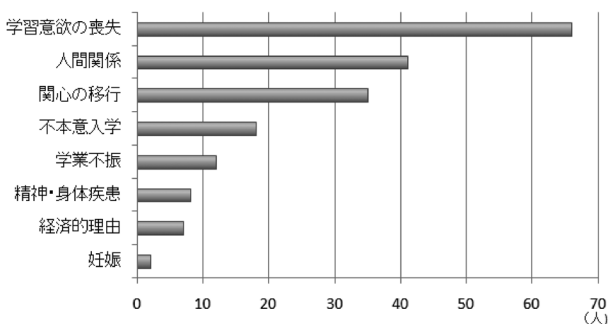
9

自分のことをどう思うか
 (浅野智彦「大学生の生活と意識(4)」日本社会学会第84回大会配布資料から転載)



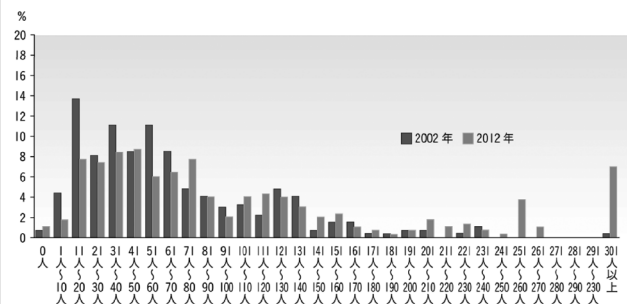
10

大学生の中退理由
 (NPO法人「NEWVERY」2009年調査)



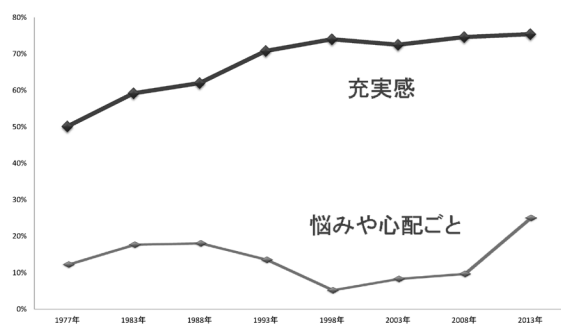
11

友だちの人数の変化(16~19歳)
 (青少年研究会「都市在住の若者の行動と意識調査」から作成)



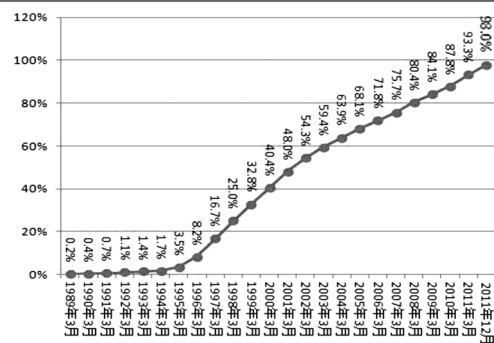
12

友人や仲間との関係に...
(内閣府「世界青年意識調査」から作成)



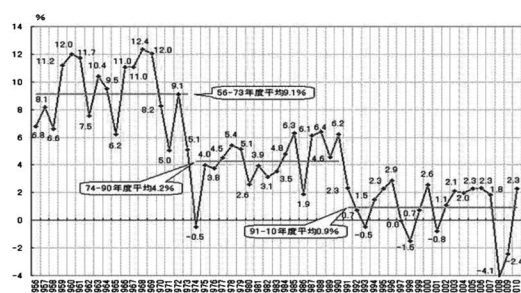
13

携帯電話の普及率(総務省調査)
(WEBサイト「Garbage NEWS.com」から転載)



14

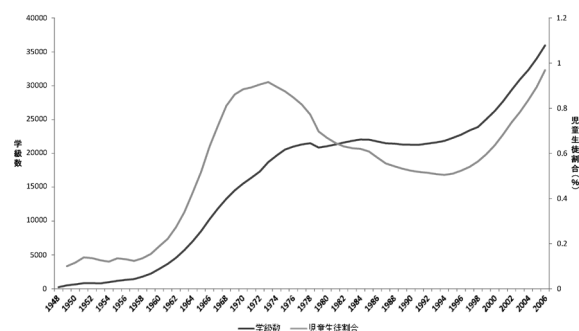
経済成長率の推移
(ウェブサイト「社会実情データ図録」から転載)



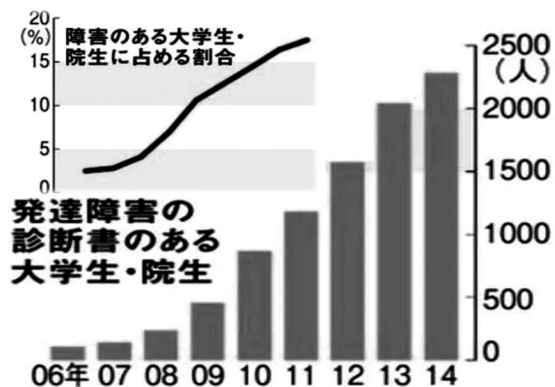
15

特殊学級と在籍児童生徒の推移

(文部科学省「特別支援教育資料」、赤羽由起夫『子どもの心』と逸脱の知識社会学』筑波大学博士論文から重引)



16



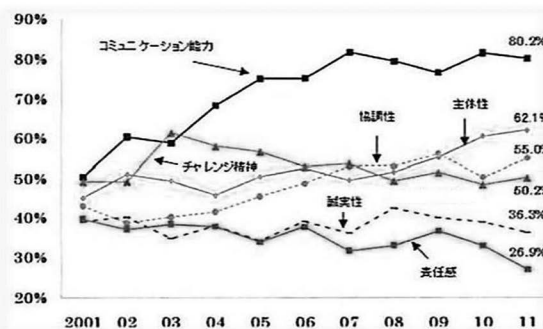
17

「コミュニケーション能力」が出てくる朝日新聞の記事数
(「朝日新聞」(2012年7月21日)朝刊から)



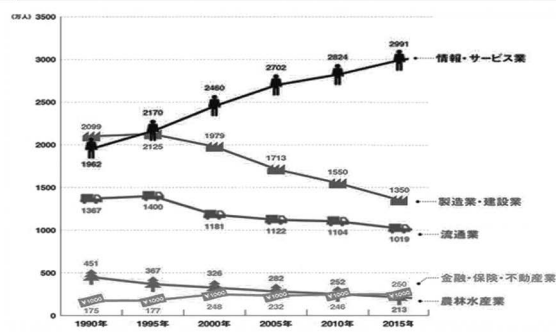
18

企業が採用時に重視する点
(経団連「新卒採用に関するアンケート調査」から)



19

産業別就業者数の推移
(リクルート「キャリアガイダンス.net」2011)



20

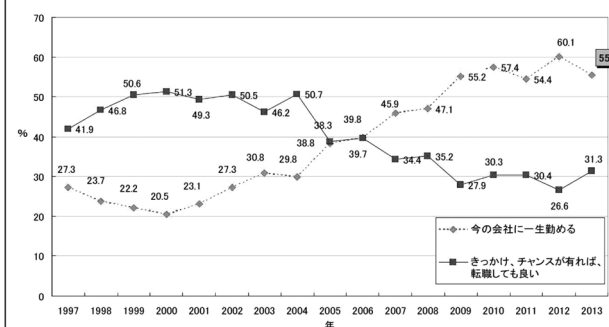
就活における最大の武器だと思うもの

	1 位	2 位	3 位
文系男子	コミュニケーション能力	行動力	アルバイト経験
理系男子	学校で学んだ基礎知識	コミュニケーション能力	行動力
文系女子	笑顔	アルバイト経験	コミュニケーション能力
理系女子	学校で学んだ基礎知識	笑顔	コミュニケーション能力

出典: 2016年マイナビ女子大生のライフスタイル調査

21

チャンスがあれば転職/今の会社に一生勤める
(「新入社員の意識調査」日本生産性本部)

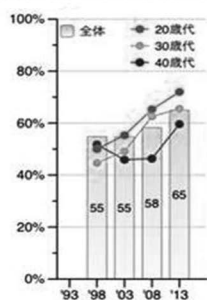


22

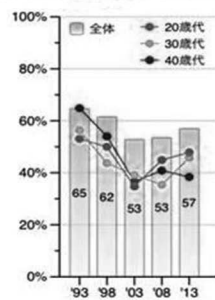
職場の人間関係観

(統計数理研究所「日本人の国民性」調査から)

上役と仕事以外の付き合いはあった方がよい



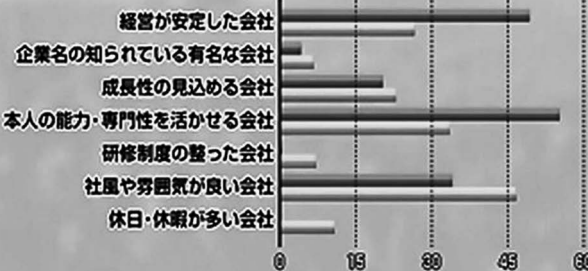
家族的な雰囲気のある会社につとめたい



23

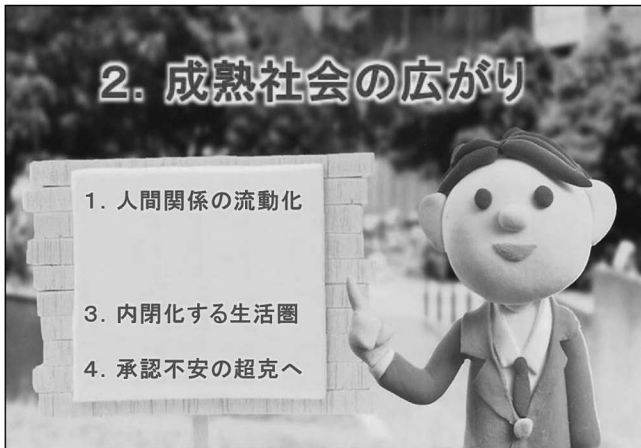
保護者と現役学生 企業選択観の比較

(マイナビ「就職活動に対する保護者の意識調査」2014)

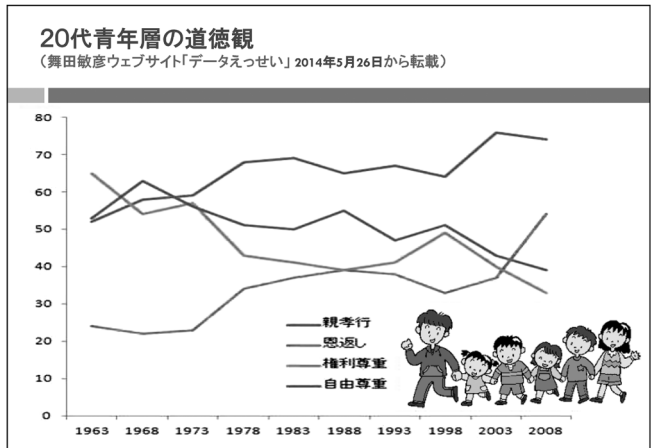


出典: マイナビ「就職活動に対する保護者の意識調査」2014

24



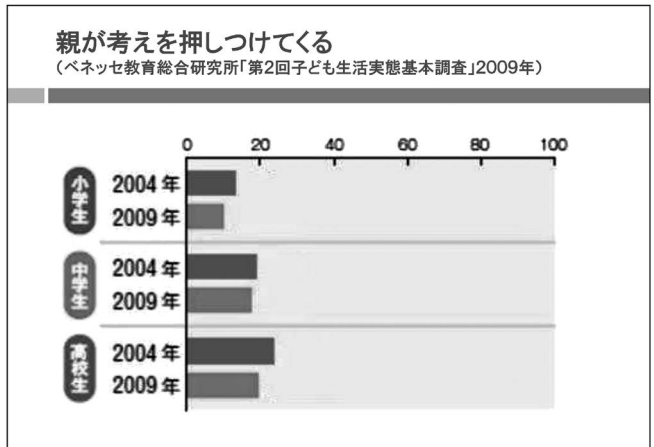
25



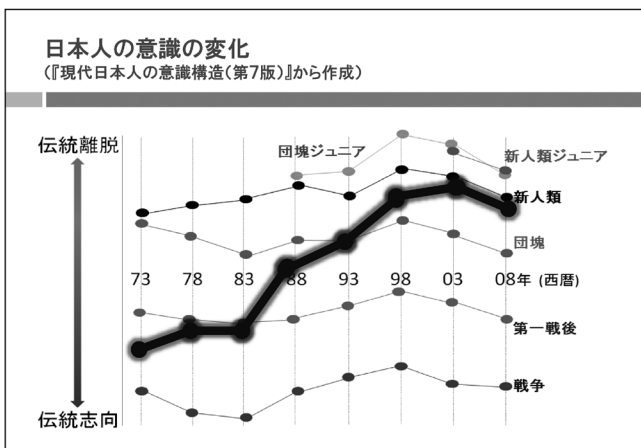
26



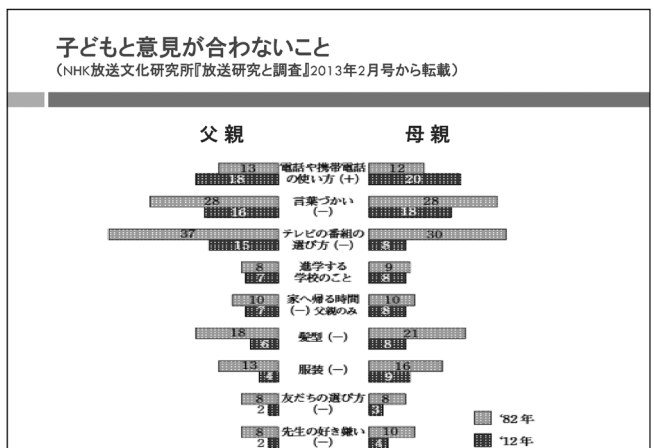
27



28

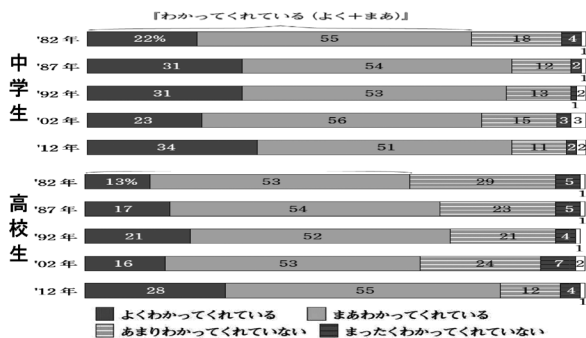


29



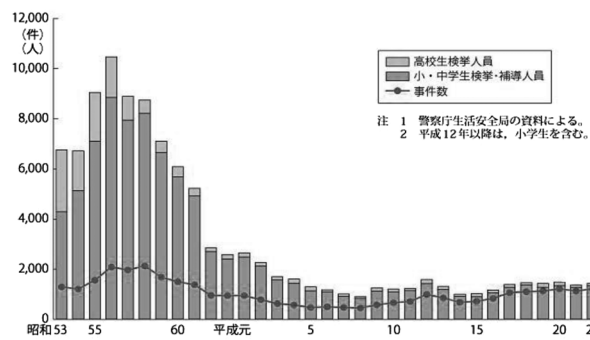
30

担任の先生は分かってくれているか
(NHK放送文化研究所『放送研究と調査』2013年1月号から転載)



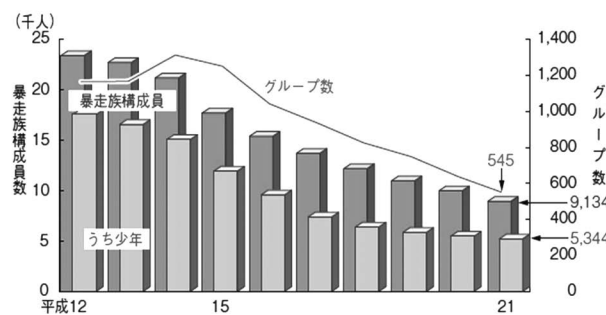
31

校内暴力の事件数と検挙補導人員の推移
(『平成23年版犯罪白書』から転載)



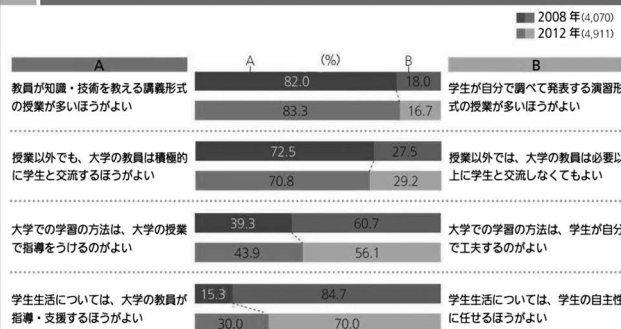
32

暴走族の構成員数とグループ数の推移
(『平成22年版犯罪白書』から転載)



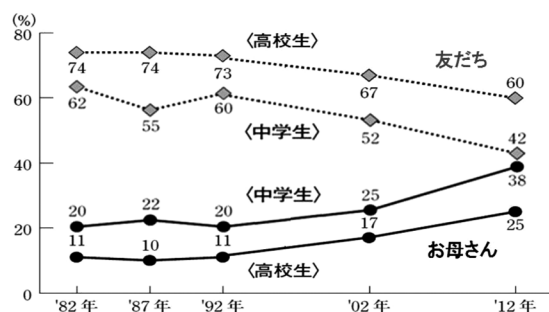
33

大学教育に対する選好
(ベネッセ教育総合研究所「大学生の学習・生活実態調査」)



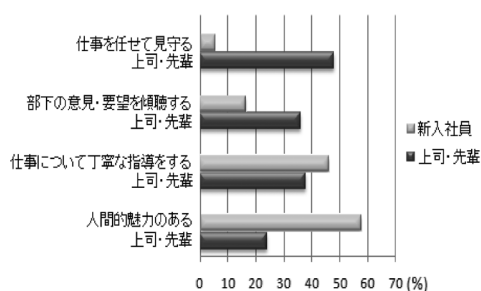
34

悩みごとの相談相手
(NHK放送文化研究所『放送研究と調査』2013年1月号から転載)

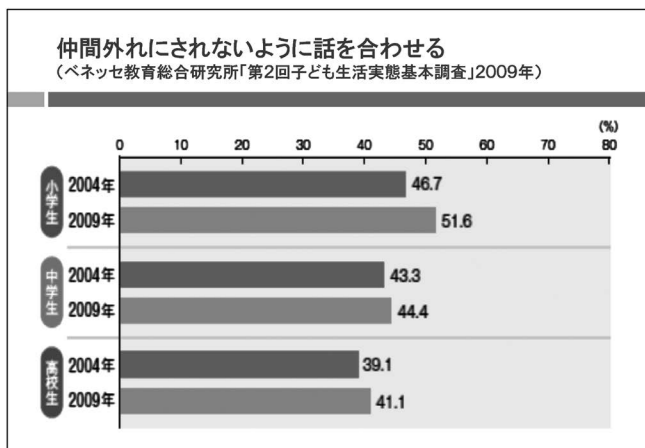


35

理想的だと思う上司・先輩
(日本能率協会「会社や社会に対する新入社員の意識調査」2007年)



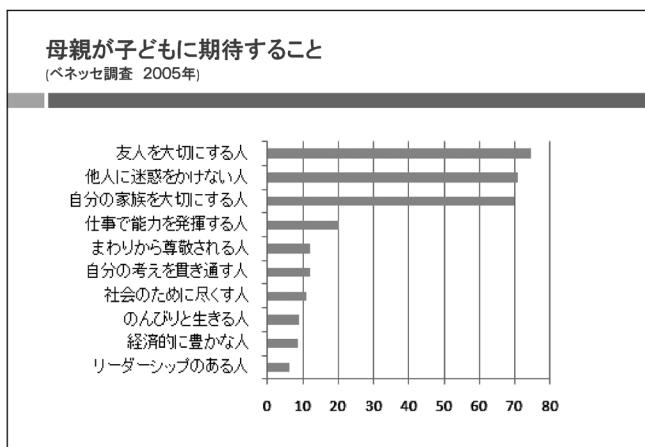
36



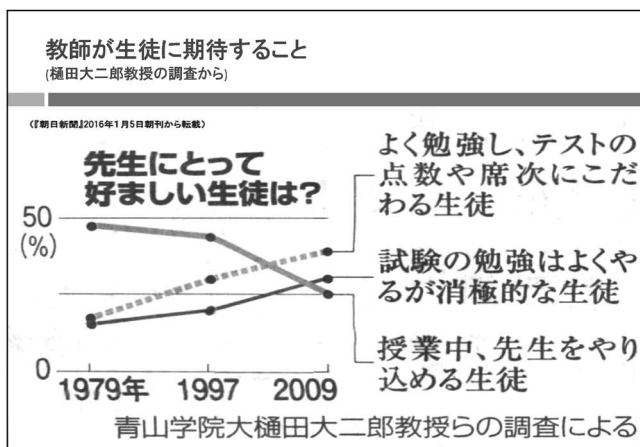
37



38



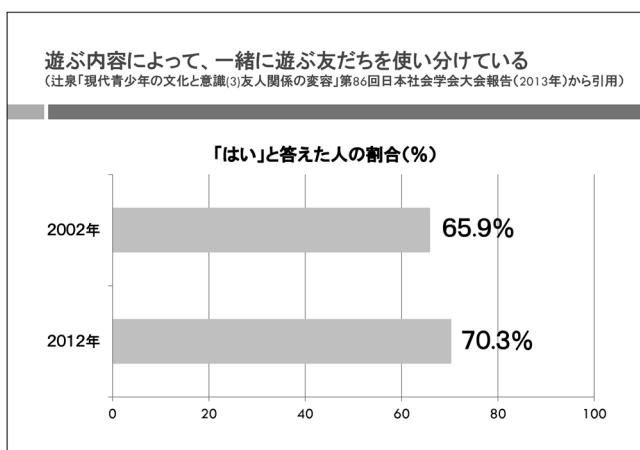
39



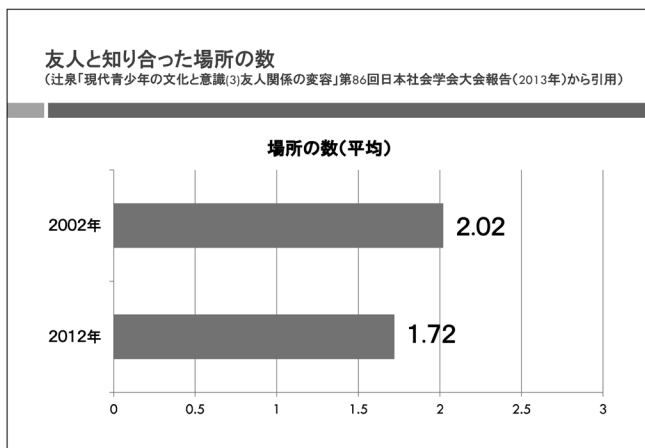
40



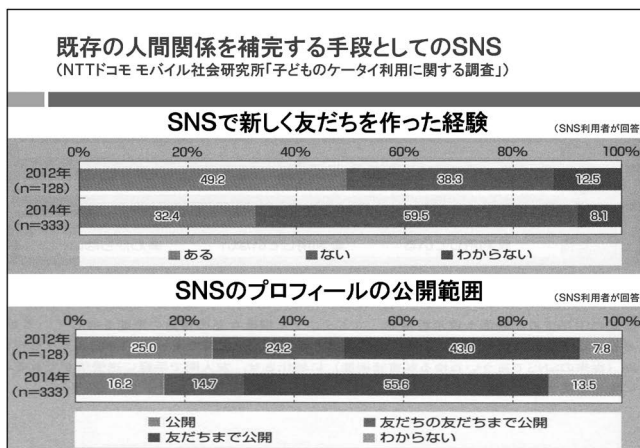
41



42



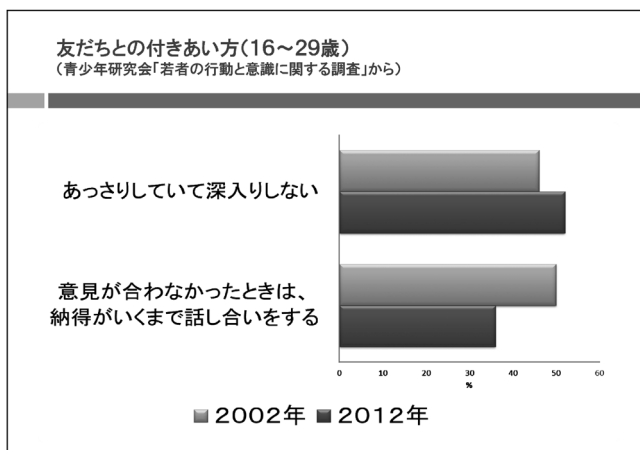
43



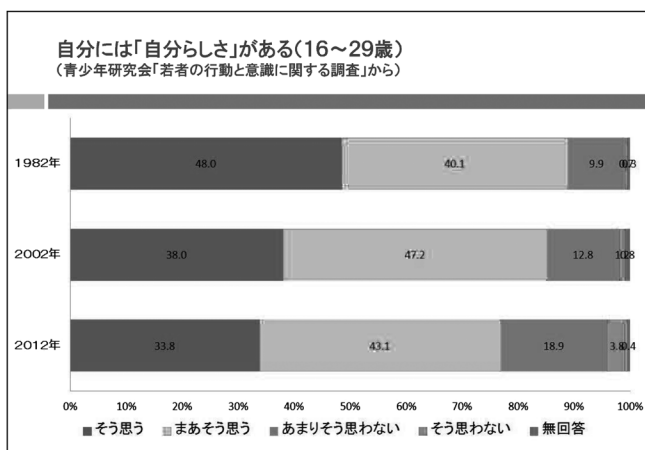
44



45



46



47



48

4. 承認不安の超克へ

1. 人間関係の流動化
2. 成熟社会の広がり
3. 内閉化する生活圏



大学生の普段の生活態度

(浅野智彦「大学生の生活と意識(4)」日本社会学会第84回大会配布資料)

- 過去を振り返って、いろいろと思いたしながらすごしている
- いま現在の充実感をもっとも大事にしながら生活している
- よい未来を迎えられるよう、それに向けて努力をしている
- 何かを深く意識することなく流れるまま日々を暮らしている
- 欠損値

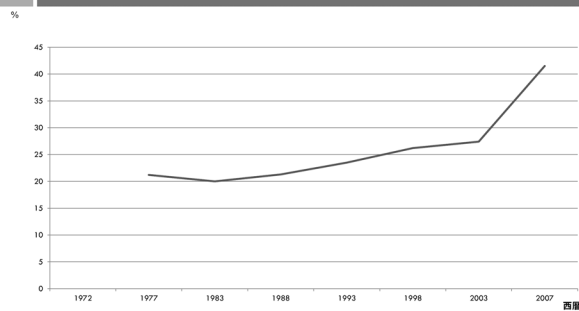


49

50

家族といるときに充実感

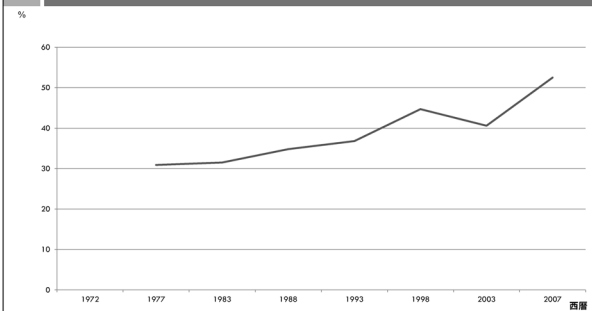
(内閣府「世界青年意識調査」から作成)



51

いま住んでいる地域が好き

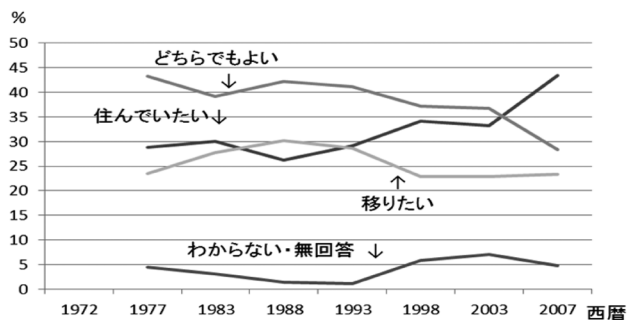
(内閣府「世界青年意識調査」から作成)



52

現在の地域に今後も住みつづけたい

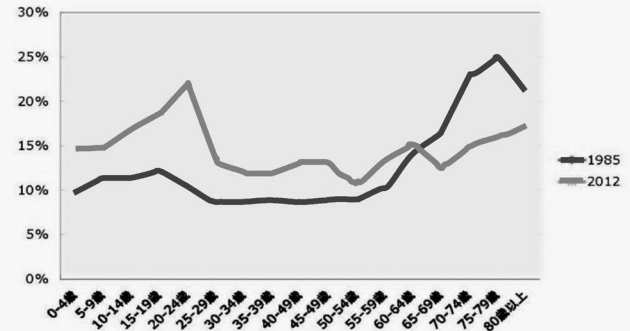
(内閣府「世界青年意識調査」から作成)



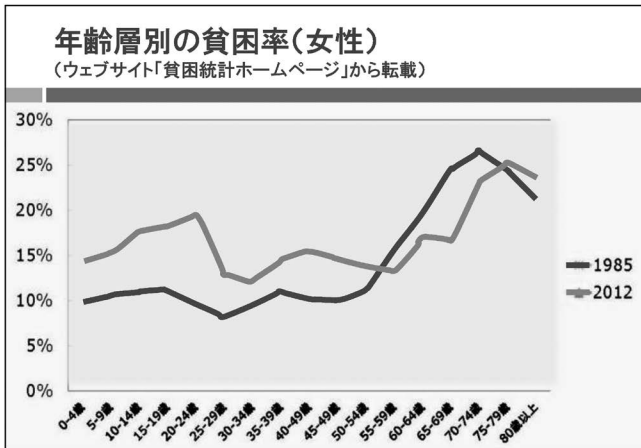
53

年齢層別の貧困率(男性)

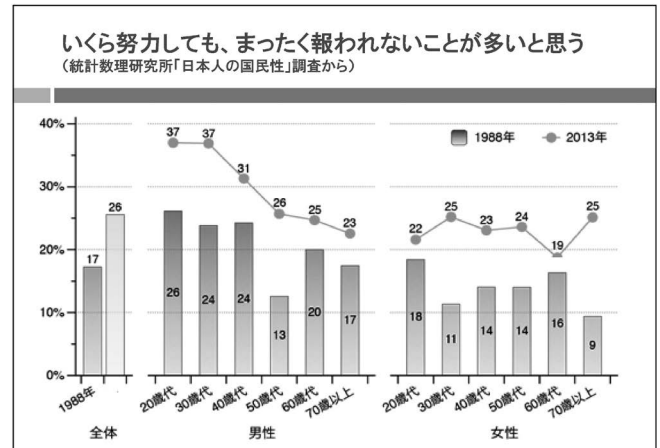
(ウェブサイト「貧困統計ホームページ」から転載)



54



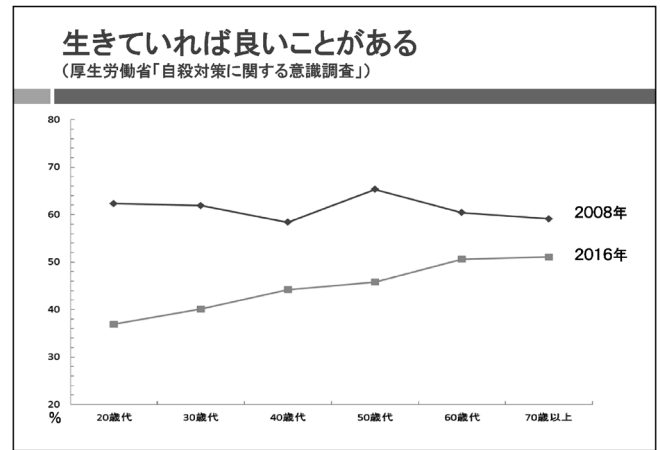
55



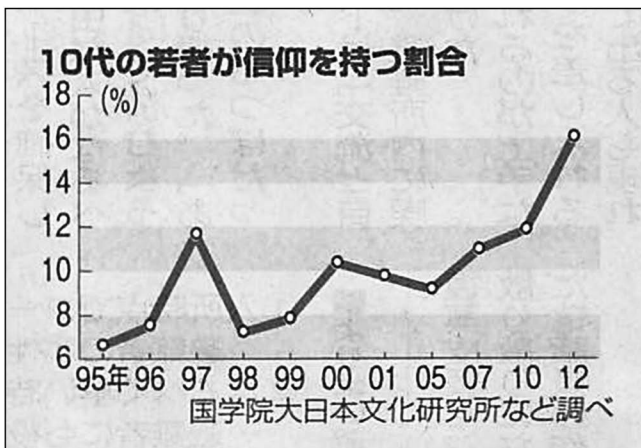
56



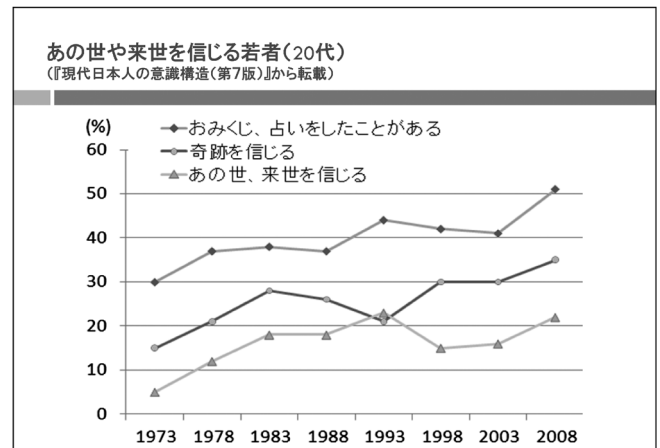
57



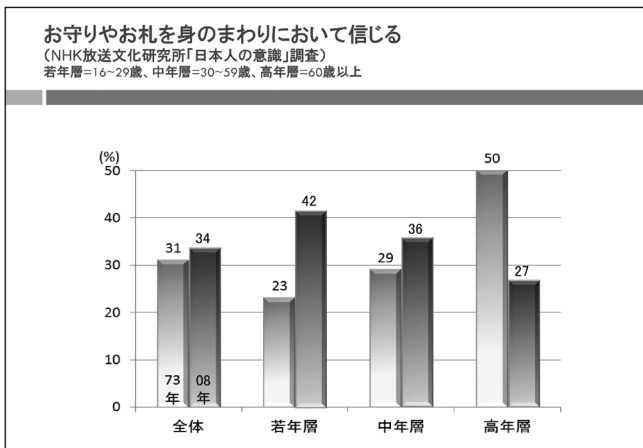
58



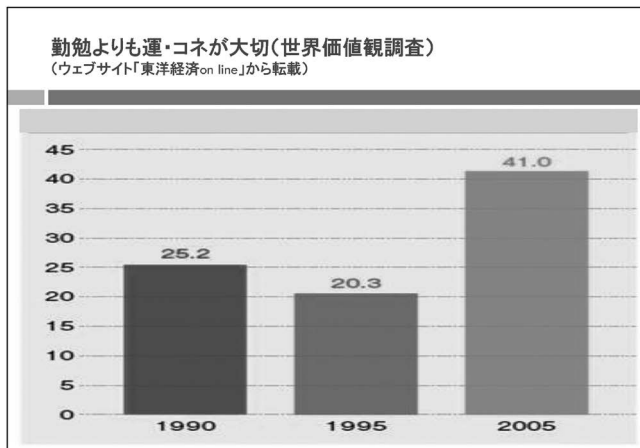
59



60



61



62



63



64